

大人用



伝道地便り

2019年 第3期 南太平洋支部

- | | |
|----------------------|--------|
| 第1話「40 キロの減量の秘訣」 | ソロモン諸島 |
| 第2話「従業員に刺激を受けた CEO」 | ソロモン諸島 |
| 第3話「寝具のプレゼント」 | ソロモン諸島 |
| 第4話「つねに押し進める」 | フィジー |
| 第5話「お葬式を通して真理を知った」 | フィジー |
| 第6話「足を失い、新しい人生が始まった」 | フィジー |

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. 40 キロの減量の秘訣

ソロモン諸島



ヘリック・ダン・シオブ 46 歳

ソロモン諸島のセブンスデー・アドベンチスト家庭で育ったヘリック・ダン・シオブは武道の達人として大成功していました。

タヒチ島で開催された武道の南太平洋地区大会にソロモン諸島の代表として、またフィジーで行われた南太平洋全国大会に国の代表として参戦しました。そしてメダルを獲得したのです。

ところが、製図技術者としての仕事が忙しくなってきました。そして結婚して4人の子どもが生まれると、聖書もめったに読まず、教会にも行かなくなりました。体を鍛えることも止め、簡単に食べられるフィッシュ・アンド・チップスやチキン、コカ・コーラなどの加工食品を大量に食べるようになりました。11年の間に、ヘリックの体重は増え続けてとうとう105キロになっていました。彼の理想体重である65キロを大幅に超えていたのです。

ある日、ヘリックの左足が猛烈に痛み出しました。日に日に痛みはどんどんひどくなります。病院で治療を受けても、何も効き目があり

ません。そして、とうとう歩けなくなってしまいました。

ヘリックは半狂乱になりました。足に血液が巡っていないことがわかっていたので、足を切断することになるかもしれないと心配になったからです。その時、神様のことを思い出し

「神様、どうぞ治療法が見つかるよう助けてください」と彼は祈りました。

祈り終わってしばらくすると、年配の親戚がソロモン諸島の首都、ホニアラにあるヘリックの自宅を訪ねてきました。なんと、この親戚はヘリックを訪ねなければいけないと強く感じたというのです。そして何故ヘリックが歩けなくなったのか尋ねました。ヘリックは足の痛みのこと、また治療法が無いことを伝えました。

「わかった、力を貸そう」と親戚は言いました。そして家庭療法の準備をし、毎日ヘリックの手当てをしてくれたのです。3週間後には、ヘリックは立てるようになりました。でも、まだ歩けませんでした。

「足の筋肉が落ちているから、足の運動をする必要がある」と親戚は言いました。ヘリックは神様が癒してくださっていることに感謝し、こう祈りました。「神様、どうぞ私を用いてください。ほかの人の祝福になりたいです。あなたが私に対してお持ちになっているご計画を教えてください」

祈り終わると、減量しなければいけないと強く感じました。ヘリックは夜あまりよく眠れず、背中の痛みにも苦しめられていました。歩くと呼吸困難になります。足の痛みが体重に関係していると、彼はわかっていました。

でも、いったいどうしたら減量できるのでしょうか？ヘリックはエレン・ホワイトが書いた『食事と食物への勧告』を思い出し、それを読み始めました。そして食欲によって罪がこの世

に入ってきたことを知り、びっくりしました。
「食欲をほしいままにしたことによって我々の最初の両親がエデンの園を失ったように、食欲と熱情を固く自制することがエデンの園を再び手にする唯一の希望である」(『食事と食物への勧告』英文 59 ページ) と書いてあったのです。

そこで食生活を大きく変えることにしました。加工食品を止め、壮絶な戦いを経てカフェイン入りの飲み物も止めました。そして砂糖と乳製品も止めたのです。代わりに神様がもともとご計画され、人類に最初に与えられた野菜中心の食事になりました。果物、野菜、穀物、そしてナッツです。16 時以降は何も食べないようにし、食べ過ぎにも注意しました。

それに加え、運動も始めました。毎日歩くことから初め、家でできる簡単なトレーニングも学びました。

すると 12 か月で体重が 40 キロ減り、理想の体重に戻ることができたのです。体調も良くなり、懸垂など武道をしていたときでさえできなかった運動もできるようになりました。

それから 2 年たった今、ヘリックは 46 歳になりました。現在はアドベンチストが所有している会館で太り過ぎになった島の人たちのために無料のフィットネスクラスの指導をしています。200 人以上の様々な信仰を持つ人が、運動するため週 4 日間集まってきます。また、国の保険省でセミナーを行い、民間企業と連携して働いています。彼のアドバイスはすべてエレン・ホワイトから来ています。そして人々は減量に成功し、元気になっています。

「神様は私をこの働きに召しておられたのだとわかり、霊的な生活の励みにもなっています。」とヘリックは言います。「神様が与えてくださった祝福に感謝します。ささやかですが、他の人に対して祝福となることができるのです」

今期の 13 回献金の一部は、「1 万人のつま先を救え」というソロモン諸島の糖尿病による足

指切断を防ぐための活動のために用いられます。この活動は 2017 年 12 月に始まり、ヘリックが地域に提供している運動プログラムにも資金を「提供」しています。みなさまの安息日学校伝道献金へのご協力を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・ヘリックの動画を bit.ly/Herik-Siope で見るができます。
- ・このお話の写真を bit.ly/fb-mq で見るができます。
- ・次のお話にもヘリックが出てきます。

宣教メモ

- ・ソロモン諸島へ最初に行ったアドベンチスト宣教師は G.F.ジョーンズとその妻でした。オーストラレーシアの伝道委員会から送られ、1914 年 5 月 29 日にギゾ島に到着しました。ジョーンズは地元の船員を雇い、アドベント・ヘラルドというケッチ (2 本のマストをもつ帆船) でニュージョージア島の西海岸のヴィラに向かいました。そこに伝道活動の本部を置き、学校を開いたのです。
- ・19 世紀と 20 世紀に来た宣教師によって紹介されたキリスト教がこの島の主な宗教です。主な宗派 (教派) は英国教会、ローマ・カトリック、メソジスト、そしてセブンスデー・アドベンチストです。

2. 従業員に刺激を受けた CEO（最高責任者） ソロモン諸島



ジェフ・サムエル 51 歳

ジェフ・サムエルは、自分の目を疑いました。ジェフはソロモン諸島にある住宅建設会社の CEO（最高責任者）でしたが、従業員の 1 人が 1 年間で「40 キロの減量に成功した」ことが信じられませんでした。

サムエルは自分のお腹を見下ろして思いました。「自分にも同じことができるだろうか？」

ジェフの体重は 130 キロで、10 年間も高血圧に苦しんでいました。そして、自分が破滅への道をたどっていることに気がついたのです。

ジェフはアドベンチストの健康メッセージをよく知っていました。アドベンチストの家庭で育ち、教会学校にも通っていたからです。しかし、ジェフの体は健康メッセージとは正反対の状態でした。そして、アドベンチストを含むソロモン諸島の人々と同様、夕食の時に一番多く食べていたのです。

ジェフは食事前に「神様、この食事を感謝します」と祈ってはいましたが、「神様、食欲をコント

ロールできるよう力を与えてください」と祈ることは考えてもみませんでした。

2017 年初めのある日、ジェフは自分の会社の従業員で製図技術者のヘリックに話しかけました。

「どうやって減量に成功したんだい？」

すると、ヘリックはエレン・ホワイトの『食事と食物への勧告』という本をもとにした食事と運動のプログラムに従ったことを教えてくれたのです。

「私が何をしたのかお教えしますよ」とヘリックは言いました。

「いつから始められるかな？」

「もしよろしければ、今日にでも」

二人はソロモン住宅建設会社の事務所をあとにし、毎日 45 分間の運動を海辺や木の下、また他の場所で始めました。ジェフにとってはハードでした。様々な運動に 20 秒ずつ取り組むのです。

「始めたばかりのころ、20 秒も続けることができませんでした」とジェフは言います。「秒数を数えるのですが、5 秒もできれば喜んでいました。そしてその秒数を伸ばそうと毎日挑戦し続けたのです」

ジェフの体重が減るにつれ、他の人も運動に参加し始めました。ヘリックはグループの指導を続け、ジェフはコーディネーターの役割を引き受けました。今日、200 人以上の様々な信仰を持つ人が週 4 回運動をするためにアドベンチストの所有している会館に集まります。

各トレーニングはいつもお祈りで始まり、お祈りで終わります。週に 1 度、みんなで証を分かち合う時間が設けられ、ヘリックとジェフは食事の重要性を強調します。二人のアドバイスは直接エレン・ホワイトから来ているのです。

「もし今体調が良いと感じているなら、霊的な

生活にも変化を起こしてみませんか？」とヘリックは人々に問いかけます。

「毎朝祈ることが、気持ちにどんな変化を与えるかも想像してみてください」とジェフは続けて言います。

そして人々が体の調子が良くなっていくのを体感するにつれ、「へム・ワカ！」(本当に効果的だ！)という叫び声が会館の中にたびたび響き渡るのでした。

ヘリックもジェフも医療の専門家ではありません。でも、気がついたことがありました。それは、神様のご計画されたとおりに体を扱うなら、体が自然に癒されるように神様が助けてくださるということです。

ジェフの理想体重への道のりはまだありますが、18か月で35キロ近くもの減量に成功しました。そして今までにないほど気分も良くなったのです。

「走ったり、登ったり、ジャンプもできます！」と満面の笑顔でジェフは言います。「私にできるのですから、誰にでもできます」

肥満はソロモン諸島が抱える大きな問題で、糖尿病を含むいくつもの病気の原因になっています。今期の13回献金の一部は、「1万人のつま先を救え」というソロモン諸島の糖尿病と戦う活動のために用いられます。この活動は2017年末に始まり、ヘリックとジェフが地域に提供している運動プログラムに資金を提供しています。みなさまの安息日学校献金へのご協力を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ジェフの動画を bit.ly/Geoffrey-Samuel で見ることができます。
- このお話の写真を bit.ly/fb-mq で見ることができます。

宣教メモ

- ソロモン諸島はスペインの探検家、アルバロ・デ・メンダーニャ・デ・ネイラによって発見されました。ガタルカナル島で砂金を発見したメンダーニャは、ソロモン王の財宝を見つけたと考えて「ソロモン諸島」と島を名づけました。
- ソロモン諸島には、遅くとも紀元前2000年からは人が住んでいたと考えられています。
- お金という概念はソロモン諸島では比較的新しいものです。物々交換や貝殻貨幣など通貨の代替形態が今でも残っています。

3. 寝具のプレゼント

ソロモン諸島



キニー・エイトリア 18 歳

キニー・エイトリアはたった 18 歳でしたが、女性執事として選ばれました。ソロモン諸島のセブンスデー・アドベンチストの全寮制の学校教会執事です。

キニーは大喜びでした！ お母さんも女性執事をしていたのですが、まさか自分が女性執事として選ばれるとは思ってもみなかったからです。

ある日、牧師先生は 8 人の女性執事を集めました。キニーを入れた 4 人の学生と、4 人の大人です。みんなベチカマ・アドベンチスト大学教会における働きを話し合うために集まり、ました。牧師はキニーと同じ女性執事で友達でもあるウェンディの二人に特別な働きがあると言いました。女子寮で早急に助けが必要な女の子がいるか調べてほしいというのです。

キニーとウェンディはすぐに行動を起こし、寮の中を調査し始めました。女子 40 人が二段ベッドで眠る大部屋です。二人は全員が綺麗なシーツ、毛布、枕を持っているか、また洋服やペン、紙などの学用品もあるか確認しました。そして何か必

要なものがありそうな子には話しかけました。

「元気になっている？」とウェンディは尋ね。

「学校はどう？何か助けてほしいことはある？」とキニーは聞きました。

ある子は洋服が、またある子はペンや紙が必要でした。

そうしているうちに、キニーとウェンディはミットリーン・トドンガのベッドに気づきました。二段ベッドの下の段に、綺麗にたたまれた薄い毛布が 1 枚だけ置かれています。マットレスもなく、夜眠るときに固い木の板から体を柔らかく包むものは何もあります。シーツも枕もないのです。

そして、二人はミットリーンが授業に着ていくための白いブラウスも、黒い長いスカートも持っておらず、必要なものが他にもあることに気づきました。

キニーとウェンディはミットリーンと話したいと思いましたが、他の女子生徒から彼女は学校のコワイヤーと一緒に首都のホニアラにある美術館へコンサートのために 1 日中出かけていると聞きました。

女の子たちは、ミットリーンが学校へ来て 1 年目だと教えてくれました。彼女は 7 年生で、つい最近ほかの島からやってきたばかりだったのです。彼女の両親はアドベンチストではありませんでしたが、娘のために精一杯のことをしていました。母親は、甘いクリーム入りのパンとレモネードの棒付きアイスクャンディーを作り、父親がそれを販売していました。それでもお金が足りないのです。

更に、女の子たちが教えてくれたことはキニーを悲しい思いにさせました。ミットリーンが夜に泣いていたというのです。ほかの女の子が、彼女が貧しい家庭から来たと言っていたのでした。そして、友達同士でミットリーンを物笑い

の種にしていたのです。

「ミットリーンはちゃんとした寝具も持ってないのよ」とある子が言いました。

「なんでここに来たのかしら？」とほかの子が言いました。「みんなちゃんとした寝具があるのね」

キニーとウェンディは牧師先生のところへ行き、ミットリーンについて伝えました。「わかった。マットレスと服を買ってこよう」と牧師先生は言いました。

3人はさっそく町へ出かけていき、ミットリーンがふわふわで気持ちのいいベッドで眠れるように厚さ5センチのマットレスを買いました。そして茶色いシーツと小さな花模様のついた茶色いシーツ、枕と茶色い枕カバー、白いブラウスと黒いスカート、紙、ペン、石鹸、歯磨き粉、そして歯ブラシも買ったのです。

寮に戻ると、キニーとウェンディはミットリーンのベッドを整え、洋服やほかの品物をその上に置きました。

その日の夕方、ミットリーンがコワイヤー旅行から帰ってきてベッドを見ると、衝撃を受けました。

「このマットレスは誰の？」とミットリーンはほかの子に聞きました。

「あなたのよ」と一人が言いました。

「あなたのために、誰かが買ってきたのよ」と別の子。

「いったい誰が私のために買ってきてくれたの？」ミットリーンは尋ねました。

「キニーとウェンディーがマットレスや服を買ってくれたのよ」と女の子が答えました。

その日の晩、キニーが寮に戻ってくるとミットリーンは泣きながら彼女に駆け寄りました。

「誰かが私のためにマットレスや服を買ってくれるなんて思ってもみなかった。本当に素敵なことをしてくれてありがとう！ お父さんも、二人が私のためにしてくれたこと、本当に喜ぶと思うわ」

キニーはミットリーンの喜びようを見て、とても嬉しくなりました。そして、神様は私たちが他

の人を助けるようご計画をお持ちなのだと感じたのです。

「いいのよ」とキニーはミットリーンを抱きしめながら言いました。「他の人を助けるのが、神様のお働きなんだもの」

みなさまの安息日学校献金へのご協力を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

・ベチカマ・アドベンチスト大学には5つの女子寮と6つの男子寮に住む学生、また地元から通っている学生を含めて530人在学しています。

・聴衆に、贈り物をサプライズでもらったことがあるか、またどういう気持ちになったか尋ねてみましょう。ミットリーンは「マットレスがとても気に入りました。お母さんとお父さんではなく、キニーとウェンディが買ってくれたからです。本当に大切にします。花柄も気に入りました」と言っています。

・安息日学校のクラスとして、どのような素敵なサプライズができるか問いかけてみましょう。

・このお話の動画を bit.ly/Kinnie-Aitorea で見ることができます。

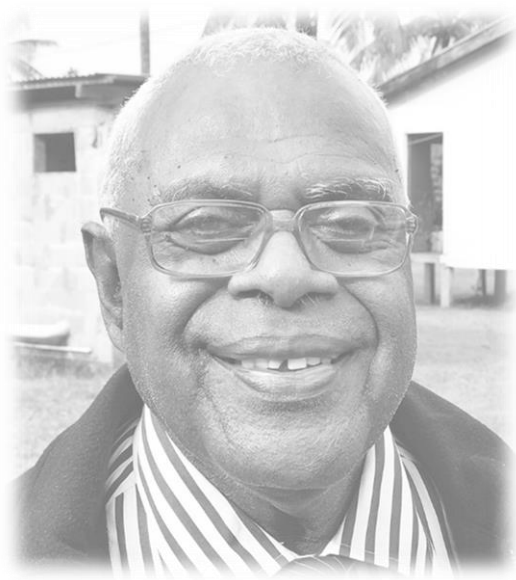
・このお話の写真を bit.ly/fb-mq で見るができます。

宣教メモ

- ホラ貝の貝殻は、ソロモン諸島を含む太平洋で伝統的な楽器として使われています。人々を集めるときや、重要な行事の始まりに吹かれます。吹き出し口は貝の端を切り取るか、貝の横に穴をあけることによって作られます。

4. つねに推し進める

フィジー



ジョオリ・ラボ 67歳

フィジーの保険代理店で働いているジョオリ・ラボは、病院のベッドの上からひどく取り乱した叔母の顔を見上げました。

「ねえ、あの教会をすぐに去ったほうがいいわ。村に持ち込んでだめよ」と叔母は言いました。

「あなたは呪われてるのよ。私たちの村に新しい信仰を持ち込んだら、もっと悪いことが起こるわ。別の曜日に礼拝しているんですもの。間違っただけなのよ。そしてその結果、今苦しんでるんだわ」

ジョオリは包帯だらけの腕を見下ろしました。両腕を交通事故で骨折しました。そして二人の甥が亡くなったのです。

バプテスマを受けたとき、ジョオリは出身地であるナボシワ村の人たちに自分の信仰を伝えたいと熱望していました。しかし、村の人からの反感はすごいものでした。村の大部分の人々はみな親戚で、別の教派のキリスト教会に属していたからです。それでもジョオリは伝道講演会を開き、10人がバプテスマを受けました。そして教会を建てるために1区画の土地を確保し、その土地を開墾

する手伝いを新しい教会員にもお願いして日にちを決めました。

土地を開墾する前日、ジョオリは朝早く起きました。27歳の甥をナンディ空港まで連れていくためです。そして、スバルのセダンに甥の母親と2人の甥、そしてジョオリの13歳の息子も乗りこみました。

ところが朝4時ごろ、ジョオリは運転しながら居眠りをしてしまい、車が道路から外れて事故を起こしてしまったのです。27歳と16歳の甥は即死でした。母親と13歳の甥は重症で病院に運ばれ、ジョオリは腕を骨折しました。そしてなぜかジョオリの息子は無傷だったのです。

ジョオリの叔母は、アドベンチスト教会を建てる計画を止めるよう説得しに病院へやってきたのでした。

ジョオリはベッドから叔母の顔を見上げました。

「叔母さん」とジョオリは話し始めました。「叔母さんには一人息子しかいないよね。もし僕がこの病院のベッドの上で死ぬことによって彼がアドベンチストになるのであれば、僕は叔母さんの息子のために自分の命を使える機会を与えてくださる神様に感謝するよ」

叔母さんは顔を背けましたが、目には涙が浮かんでいました。

ジョオリは自信を持って話していましたが、教会を建てるべきかは確信がありませんでした。そして病院にいる間、ずっと祈っていました。「神さま、私があなたの御心を行っているのかわかりません」

しかし、病院を退院したあと、彼にはもう迷いはありませんでした。教会は立てる必要があるのです。ジョオリはエレン・ホワイトと共に次のように言うことができました。「苦難は殉教者アベルの時代から、神の民の一部分なのです。族長たち

は神に対して真実であり、神の掟に従順であるために苦しみました。教会の大いなる頭はわたしたちのためにお苦しみになりました。彼の最初の使徒たちは、そして初代教会は苦しみました。幾百万の殉教者たちは、宗教改革者たちは苦しみました。キリストの間もない出現によって完成される、不死の命の祝福に満ちた希望を持つわたしたちが、どうして苦難の生活にひるんでよいのでしょうか。」
『教会への証 第1巻（分冊1）』78ページ

ジョオリは、悪魔が怒りを発しているのので、福音を伝えているときに苦難があるのだと気づいたのです。そして、1か月しないで教会が建てられました。

ジョオリは自分の村に教会が建てられたことを嬉しく思いましたが、さらに教会を建てたいと切望していました。今度はカウヴァという村です。しかし、もうだれにも悲劇は起きてほしくありません。そこでジョオリと教会員は1週間に2回、断食して祈ることにしました。そしてカウヴァ村で戸別訪問を続けたのです。

「主よ、私の村ではひどい経験をしました」「今、別の村に福音を宣べ伝えようとしています。どうぞ前回のような悲劇が起きないようにしてください。どうか同じことが起こらないよう、私の行動すべてを導いてください」とジョオリは毎日祈りました。

そして驚いたことに、村の一人がアドベンチストを気に入り、自分の家で安息日礼拝をしてくださいとジョオリを招いてくれました。そしてのちにアドベンチスト教会を建てるための土地を寄付してくれたのです。

ジョオリは、祈りと断食のおかげで教会を建てるのがしやすくなったと言っています。

それから3つめの村、ビュレツに行きました。そして今回もジョオリと教会員は祈って断食をしました。嬉しいことに、村長とその家族がバプテスマを受けました。

しかし、教会を建築する前に悲劇が起きました。村長が糖尿病で亡くなったのです。村の人たちは、村長がアドベンチストになった罰を受けたのだろうかと思いをめぐらしています。

ジョオリは、悪魔が村長の死を使ってアドベンチストの働きを攻撃しているが、教会は必ず建てられるだろうと言っています。また今期の13回献金を楽しみにしています。今回の13回献金の一部は、糖尿病による死を防ぐ助けとなる「1万人のつま先を救え」という健康活動のために用いられます。

ジョオリは神様が最終的に村で勝利をおさめられると語っています。インタビューで、彼は病院で叔母に彼女の一人息子のために死ぬ覚悟があると伝えたあとに何が起こったかを話してくれました。のちに、叔母の息子と、その子供たち4人がバプテスマを受けてアドベンチストになったのです。

「叔母が亡くなる前に訪問した時、叔母は一人息子に福音を伝えてくれたことを感謝していました」とジョオリは言います。「神様がすべてをご支配なさっているのです」

〈お話のヒント〉

・ジョオリの動画を bit.ly/Joeli-Rabo でみることができます

宣教メモ

- フィジーには166の教会、101の集会所、そして26,487人の教会員がいます。人口は87万8千人で、33人中1人がアドベンチストです。
- フィジーには2つのアドベンチストの学校があります。ネイブザウ・アドベンチスト高校とスバ・アドベンチスト大学です。

5. お葬式を通して真理を知った フィジー



コシティラ・ティート 33 歳

父親が亡くなった時、誰もティートを助けてくれませんでした。

「教会で葬式はできないよ」とある人は言いました。

別の人は「埋葬だけしたら」と言いました。

ティートの父親がセブンスデー・アドベンチストになったので、フィジーの人里はなれたナカヴィカ村の人々は、ティートの父親に向かって背を向けたからです。ティートを含め、村の人たちは教派の違うキリスト教会のメンバーでした。

ティートは父親のお葬式をきちんとしてあげたいと思ったので、従兄弟だった村長に葬式をさせてくださいと嘆願しました。村長は教会でお葬式をすることを許してくれましたが、条件がありました。ティートがお葬式のためにアドベンチストのための教会を建てるということです。

そこでティートは小さな小屋を建て、親戚達と一緒にぎゅうぎゅう詰めになりながらお葬式のため小屋に入りました。そこでアドベンチストの牧師が死後の状態についてお説教を始めたのです。

ティートは死後の話を聞いてショックを受けま

した。人は死んだらすぐ天国に行くのだと思っていたからです。しかし牧師は、死は眠りのようだと言い、ヨハネ 11 章に出てくるラザロの話でイエス様も死を眠りだと呼ばれたことを指摘しました。

牧師の話を聞きながら聖句をひけるように、ティートの姉妹が聖書を渡してくれました。そしてヨハネ 11 章の言葉が牧師の言葉と合致していることに気づきました。

それから牧師は第 1 テサロニケ 4 章 16 節を開き、イエス様のご再臨のときに死者が墓からよみがえるという聖句を読みました。「すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し」と書いてあるのです。

再びティートは聖書を開き、牧師が言っていることが聖書と合致していることがわかりました。ティートは、自分の教会では礼拝中に聖書を開いたことがなかったのです。

お葬式のあと参列者と食事をするため集まると、ティートはアドベンチストの人の腕をつかまえて次のように言いました。

「どうか私の家に来てください。人が死んだらどうなるのか、もっと知りたいのです」

アドベンチストの教会員はティートの家までやってきて、死後の状態について聖書研究をしてくれました。ティートはもっと知りたくなり、その男性に聖書研究を継続してもらえるよう頼みました。

しかしティートの妻のヴィカは聖書研究を断固拒否しました。アドベンチスト教会員が訪問に来たときには、娘達と一緒に部屋に閉じこもってしまうのです。

2 ヶ月後、ティートはバプテスマについての聖書研究を受け、自分もバプテスマを受けたいと言

いました。

しかし、ティートの決心を聞いたヴィカは泣きだしてしまいました。

「あなたを選んだのは信仰が同じだったからよ」と彼女は言い、「もしあなたの教会がアドベンチストだというのなら、離婚したほうがいいわ。子供は2人いるから、あなたが1人を引きって、私が1人引き取るわ」と言い放ったのです。

ティートは悲しみましたが、バプテスマの決心が揺らぐことはありませんでした。「ヴィカ、これからは神様が自分にとって人生で1番大切なものになる。君は2番目だ」とティートは言いました。

「でもひとつだけ約束するよ。もし今まで君に対する愛が50パーセントだったとすると、今は100パーセントになったんだ」

バプテスマが終わると、ティートはヴィカが日曜教会に通うのを止めるつもりはないと伝えました。しかし土曜日には洗濯物や料理をしないよう頼んだのです。彼は両方とも自分が日曜日にするといいました。

1か月がたち、ヴィカは夫が結婚したころとはまったくの別人になったことに気がきました。学校の教師としての働きが終わった後、ティートが友人達と飲みに行くことはなくなりました。また友人を家に誘い、タバコの煙や悪口に満ちた会話をすることも無くなったのです。代わりに、仕事が終わるとまっすぐ家に帰ってきて、ヴィカや子ども達と時間を過ごすようになりました。ティートはお酒もタバコも悪口をいうことも止めたのです。

ある日、彼女はティートを呼んでこう言いました。「ティート、あなたは本当に変わったわ」「私が知っていたティートとは別人よ。今まで喧嘩が絶えなかったけれどそれも無くなったし、違う部分があったけれど、それも無くなった。家族の時間もうんと増えたわ。あなたが見つけた真理を私にも教えてちょうだい」

ティートはヴィカのためにずっと祈ってきたので、大喜びしました。そして二人は一緒に祈り、聖書研究を受けました。そして間もなくヴィカもバプテスマを受けたのです。

現在ティートは33歳で、学校でクラスを教えるのに加え、安息日学校でもクラスを教えています。そしてヴィカは子どもの初等科クラスを教えています。ティートは村の人とも聖書研究をして、二人がバプテスマに導かれました。

けれども、信仰のためにティートは学校で問題に直面しました。ある日、誰かがティートの机に排尿していたのです。また別の日には彼に関するわいせつな言葉が学校の壁に書かれていました。そして、ある日校長先生は警察を呼ぶ羽目になりました。酔っ払った村人が、ナイフでティートを脅したからです。しかし、ティートは福音を伝えと堅く決心しています。そして次のように祈っています。「神様、あなたのことを地域の人々に伝えたいと思っています。この終わりの時代に、どうか私を用いてください」

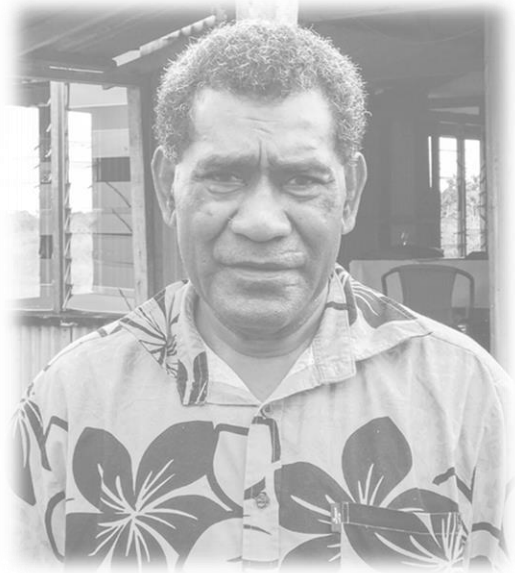
〈お話のヒント〉

- ・ティートのファーストネームはコシティラですが、みんなにティートと呼ばれています。
- ・ティートの動画を bit.ly/Kositela-Tito で見ることができます。
- ・このお話の写真を bit.ly/fb-mq で見ることができます。

宣教メモ

- ・フィジー語を学ぶとき、最初に覚えるべき言葉は「Bula」です。「Bula」は「こんにちは」という意味で、たとえフィジーのほとんどの人が英語をしゃべっていても、この挨拶はいたるところで使われています。
- ・フィジーの多くの人たちは、眉を上げることによって「はい」という意思表示をします。
- ・メケは古くから伝わる伝統的な歌と踊りです。伝統的に口承されてきたもので、フィジーのお祝いや祭り事などでも行われていました。

6. 足を失い、新しい人生が始まった フィジー



レパニ・クルデュアジャ 60 歳

レパニ・クルデュアジャは、人生が終わったと思いました。

元教師のレパニは、フィジーのナカラニ村で教会の修理をしていたとき、誤って足をナイフで切ってしまったのです。傷はよくなるどころか、レパニが糖尿病を患っていたために益々ひどくなっていきました。そしてついに、医者から「足を切断しなければいけない」と言われたのです。

手術が終わると、レパニは数ヶ月間ベッドに寝たきり状態でした。その間、自分にはいったい何が残っているのだろうと考えていたのです。特に悲しく感じたことは、17年前にアドベンチスト教会員になったにも関わらず、2本の足を使って誰かをキリストに導いたことが一度もなかったことでした。今では足が1本しか残っていません。

足を切断してから1か月たつとレパニは義足をもらい、歩くことを再び学び始めました。そして来る日も来る日も「たとえ足が1本しかなくても、神様のために何かしなければ」と考え続けたので

す。彼が祈っていると、教会が伝道をしたいと願っていた村のことを思い出しました。そしてアドベンチストの家族がその村に住んでいることを思い出したのです。そこで、その家族に伝道講演会をする手伝いをしてもらえるか聞いてみることにしました。

レパニがタクシーに乗って村に着くと、玄関で出迎えたのは娘のアナでした。伝道講演会の手伝いとして当てにしていた彼女の両親は、島の反対側のナンディへ引っ越してしまっていたのです。

「今はどうやって礼拝をしているのですか？」とレパニはアナに尋ねました。

若い彼女は、どの教会にも属していないニコという近所の人と時々礼拝をしていると答えました。

「短いお祈りしましょう、ニコを訪問してみたいです」とレパニは言いました。

レパニとアナがニコの家についたとき、突然ドアが勢いよく開きました。そしてニコが走って出てきて、「私が待っていたのはあなたです！」と叫んだのです。

ニコに招かれて彼の家に入ると、信じられない話を聞かせてくれました。ニコは、自分にイエス様のことを話してくれる人を与えてくださいと祈っていたというのです。そして神様に、自分の家に最初に訪問してきた人の教会に加わりますと約束をしていたのです。そしてその朝、茂みで薪を探していると、待ち望んでいた訪問者がやってくると強く感じたのです。それから家に走って帰ったのですが、誰もそこにはいませんでした。そしてニコがシャワーを浴び、ちょうど出るときに外からレパニの声が聞こえてきたのです。

「あなたの教会に加わりたいです」とニコは言いました。「次の安息日に妻と3人の娘達と一緒にあなたの教会に行きます」

レパニはニコと共に祈り、彼が教会に来たいと

言ったことをとても喜びました。しかし、レパニはニコにこう言いました。「次の安息日には、私があなたの家に来ます。あなたの家で教会を始めましょう」

それから七か月間、レパニは毎週安息日にニコの家で礼拝をしました。そして村のほかの人たちも礼拝に加わったのです。レパニが伝道講演会をしたあと、16人がバプテスマを受けました。その中にはニコとニコの奥さんも含まれ、彼の3人の娘のうち2人がバプテスマを受けました。

そして人数が増えるにつれて、家から他の建物に礼拝する場所を移しました。

現在 60 歳のレパニは、とても嬉しく思っています。そして今年は他の村に教会を始めたいと考えており、来年は3つ目の教会を始めることを計画しています。

レパニは、足を失ったことによって人生が変わったと言います。

「足が2本あった時にはできなかったことを、足が1本になった今しています」「何をするべきか、気づかされたからです」

今期の13回献金の一部は、「1万人のつま先を救え」という糖尿病を予防し、フィジーや他の6つの国の糖尿病の人々を助ける活動のために用いられます。みなさまの惜しみない献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・レパニの動画を bit.ly/Lepani-K で見るができます。
- ・このお話の写真を bit.ly/fb-mq で見るができます。